

特集 西田利貞氏 追悼

西田利貞さんを偲んで

石田 英實
聖泉大学

西田さんは、私にとって京都大学自然人類学研究室の先輩であり、研究面で教わりまた多くの支援をいただいた方である。

1975年、私は西田さんの調査地タンザニアのカソゲで、初めて野生チンパンジーのロコモーションをこの目で見る事ができた。それまでにチンパンジーの運動系の解剖や歩行の実験を行っていたが、チンパンジーが示す特徴を理解するために是非とも野生チンパンジーを観察したいと思っていた。そうした時期にその機会を与えられたことはじつにありがたいことであった。

アフリカへの旅は初めてであったが、自然人類研のゼミやコンパではアフリカへの旅はいつも話題になっていたので、キゴマまでは難なく到着した。しかし、その先は自信がなく、結局のところ西田さんに迎えの労を取らせてしまった。ウジジの浜では行方不明だったリヴィングストンにスタンレーが出会った記念碑や、タンガニーカ湖でとれるダガーという小鰯のような小魚を教してもらったりしながら、町の人と話す西田さんの流暢なスワヒリ語には舌を巻いた。

ウジジからカソゲまでは小型船の船旅であっ

た。湖岸伝いに一昼夜ほど南下したのであるが、途中から雨交じりの風となり寒い船旅となった。次の日の昼近くになって一度船を降り、西田さんが親しくしているアラビア人の店に寄った。大きめのカップにミルク紅茶をなみなみと注いでもらったが、その温かさと美味しさを今も懐かしく思い出すことがある。

カソゲには湖岸に沿って2つの基地があり、一つは北側のミヤコ、もう一つは南側のカンシアナであった。船はミヤコに着いた。そこには西田さんの奥さん、娘さん、息子さんの3人がいた。思いもかけないご家族の出迎えに感激した。ミヤコ基地は湖岸からすぐのところであり、魚釣りも泳ぎも容易であった。その上、近くに泉もあり居住環境としては快適に見えた。西田さん一家はここに家を作って住み、私のテントもすぐ近くに建ててもらい、快適に過ごす事ができた。小学生の娘さん、学校前の息子さんらと湖岸で泳いだのも楽しい思い出であり、奥さんには食事のお世話になり、タンガニーカ湖の魚や、飼っていたニワトリの料理などほんとうに美味しくいただいた。

当時のカソゲでは湖岸に沿って分布する2群のチンパンジーが主な研究対象であり、そのうちの1群(Mグループ)はカンシアナ基地周辺を遊動し、オトナのオスもメスも大勢いる大きな群れであった。もう一つの群れ(Kグループ)はカンシアナから北に2~3キロメートルのミヤコ基地周辺を遊動し、オトナオスが1頭しかいない小さい群れであった。

ミヤコの野生チンパンジーのロコモーションを観察して、これまでの知識を確認できたこと、

修正すべきこと、それに新しい発見と思われるものなどの仕分けをすることができた。その中で興味深い点は、大半の移動や休息・団欒が地上を利用する点であり、登攀では太めの垂直な幹をゆっくりと、尻をいつも下に向けて登り降りする動作が特徴的なことであった。1ヶ月程のカソゲ滞在ではあったが、多くを観察できて意義深いものとなった。

このフィールドでは多くの西田さんの後輩や仲間が調査を行った。その中にはすでに亡くなっている川中さんや上原さんが含まれる。今ごろおそらく三人でチンパンジー談議に花を咲かせているのではなかろうか。また今西、伊谷両先生も交えての団欒もあるのではと思いつつながら、西田さんのご冥福をお祈りする次第である。

西田さんの思い出

市川 光雄
日本モンキーセンター

西田さんと私は6才の年齢差があり、しかも私は2年も留年したので、学部時代に西田さんにお目にかかったことはなかった。私が2年遅れて大学院の自然人類学講座に入ったときには、西田さんはすでに学位を取って東京大学の人類学教室に助手として赴任された後だった。京大から東大に就職するなんて、よほど優秀な人だろうと思っていた。

西田さんと最初に親しくお話したのは、ケニアのナイロビだった。そのとき私は、日本学術振興会ナイロビ・オフィスの駐在員だった。亡くなられた伊谷先生と半年間一緒だった。ちょうど伊谷先生の留守中、たぶん調査協力定締結のためにキンシャサにご旅行中に、マハレから引き上げてきた西田さんがナイロビに立ち寄られた。当時の私は、訪問客があると、昼はナイロビ国立公園や

国立博物館、夜には市内のナイトスポットに案内するのを恒例のようにしていたのであるが、何年か前に学術振興会の駐在員を経験されていた西田さんは、いずれの方面も私よりも詳しかった。日が暮れるとともに、二人で近くのナイトクラブに出かけたが、いつのまにか西田さんは姿を消してしまった。残された私はひとりで歩いてナイロビ・オフィスにもどった。そして翌朝、西田さんは「昨夜はよく眠れなかった」とこぼしながらオフィスに來られた。ナイロビがまだ平安で、安心して夜遊びができ、夜更けにひとりで歩いて帰れるような、いい時代だった

その後、西田さんに研究の面でお世話になった。ナイロビ時代に調査した北ケニアのスエイ・ドロボの植物利用、とくに食用植物の利用に関する論文を「人類学雑誌」に投稿した折、その査読をいただいた。いちおう、匿名の査読ということであったが、的確なコメントや、細かな表現や英語の校閲に至るまで、懇切丁寧な書き込みをみれば、査読者が誰かはすぐにわかった。内容的にはまったく未熟な論文だったが、おかげで何とか掲載してもらえることになった。「人類学雑誌」に投稿したのは後にも先にもこの1回限りだが、これが採択されたために、私は定年まで30年近くも、ほとんど真面目に読んだこともないこの学会誌の購読料を払いつづけることになった。

昨年、大震災の直後にカメルーンから帰国すると、家人から、西田さんから留守中に電話があったとの伝言があった。その日の夜に電話をすると、すでにおやすみ中ということだった。数日後に電話をいただいたときに、なにかとても辛そうな声に聞こえたので心配していた。4月に入ると奥様から入院されたというメールをいただいた。すぐにお見舞いに伺ったが、案じていたよりはずっとお元気そうにみえた。食欲もあり、病院のおかゆがおいしい、とさかんに言っておられた。ケンブリッジ大学から出版が決まったというご著書のことにも気にかけておられた。4月末には退院され、自宅で静養されていた。私がお目にかかった時に

はいつも、悪くなっているようにはみえなかったが、6月になって容体が急変されたということであった。

2年近く前、私が定年になったときには、記念シンポジウムにきていただいた。その後しばらくお会いする機会がなかったが、1年前にお見舞いにかがったときにも、こんなに早くそのときが来ようとは思いませんでした。ご冥福をお祈りいたします。

フィールドワーカー

煎本 孝
北海道大学名誉教授

すでに名誉教授となり、世間にはますます疎くなった身でありながら、今回、学生時代に大変お世話になった口蔵兄のお誘いとあり、筆をとらせていただくことにした。

私が大学院に入学した当時、西田利貞氏は助手として東大理学部人類学教室に赴任した直後であった。今から42年前の1970年、私は22歳、西田氏は29歳の時である。私自身見知らぬ東京でこころもとなく、また伊谷純一郎先生の集中講義のお手伝いをしたこともあり、西田氏には親しみをおぼえた。当時、私は渡辺仁先生の指導のもと、千葉県房総半島の漁村でフィールドワークを行っていたが、途中の高后山には幾度も立ち寄り、ニホンザルの観察をさせていただいた。理学部のランドクルーザーはかつて西アジアの調査で谷に転がり落ちてもびくともしなかったと聞いていたため、安心して高后山の山道をフィールドワークの仲間たちを乗せてとばすことができた。岩野泰三氏や故四元伸子氏とも幾度か同行した。また、ニホンザルの群れの分布調査の際には故三沢光子氏も参加した。なお、私の学年には早死にの女性が多い。美人薄命か。

西田氏と高后山でニホンザルを追っていた際、小さな尾根のブッシュに登り降りしたことがある。私はかつて山岳部に所属していたこともあり、登山に関しては素人ではなかったが、登山道ではない所を自由に歩きまわるということに驚きをおぼえた。また、小川のほとりで休息した際、私は昼食をとろうと持参したカンヅメを開けようとした。しかし、カンキリを持って来ることを忘れたことに気付き、私はカンを開けることをあきらめた。ところが、西田氏はやわらかなナイフを取り出すと、これをカンに突き刺し、カンをこじ開けてしまったのである。カンヅメをナイフで切って開けるのを見たのはこれが始めてであった。私は西田氏に、常識だと思い込んでいることに私たちは無意識のうちに縛られていたのだ、ということをおぼえていただいたのである。

また、私は自然観察は子供のころから親しんでいたが、フィールドノートへの記録の方法は西田氏から学んだ。個体識別、時刻と行動の記録はその後もフィールドワークの基本としている。さらに、西田氏はアフリカの調査からの帰路の飛行機の中でもフィールドノートの束を胸の前に抱えて決して失くすことのないようにすると話した。フィールドノートに記録されたデータだけが調査の成果のすべてであり、最も大切なものであるという意味である。私も、デジタル時代の世の中ではあるが、今でもフィールドワーカーは「フィールドノートとエンピツだけで勝負する」という自負だけは持ち続けている。フィールドワークの精神は西田氏をはじめ、当時、生態人類学研究室のメンバーであった大塚柳太郎氏や武田淳氏など諸先輩に学んだ。ものごとくに縛られない自由なフィールドワーカーであった彼らに感謝している。

ある時、西田氏は私に「サルをやらないか」と言ったことがある。私は「人類学教室に来たのはヒトをやるためだからヒトをやります」と答えた。彼は「そうか」とだけうなずいたことをおぼえている。じつは、彼自身ヒトに興味があり、行動学

の本をよく読んでおり、私にサルとヒトとの表情の共通点などを身ぶり手ぶりを交えて語っていた。

しかし、その後、西田氏はチンパンジーでやることにしたと言い、おそらく伊谷先生の指南もあったのか、チンパンジーの専門家としての道を選ぶことになった。私は、その後、カナダ・インディアンに始まり、アイヌ、シベリア、モンゴル、インド、チベットをフィールドとし、理論も生態人類学に基づきながらも、民族学、文化人類学を通り、自然誌—自然と文化の人類学—へと展開することになった。私たちの研究はちょうど進化の過程でチンパンジーとヒトとが分岐したように、別々の方向に進んだように見える。

それでも、西田氏はときに著書を贈ってくれることがあった。もっとも、『人間性はどこから来たか』に関しては、あくまでもチンパンジーからみた「人間性」であり、ヒトからみた「人間性」とは少し違くと若干の違和感を覚えたことも事実である。しかし、私の考えている「人間性」というものの方が、本当は私がそう思い込んでいるだけの常識にすぎないのかも知れない。したがって、西田氏の見解は独自性のある貴重なものであると思っている。

あまり長く書くと悲しくなってしまうので、ここで筆を置くことにする。

西田さんと生態人類学研究会

大塚 柳太郎
自然環境研究センター

私は、西田さんが東大人類学教室に赴任された1969年12月から、京大人類進化論研究室に移られた1988年3月まで、囲碁を打った時間もさることながら、諸々のことで話をする時間に恵まれた。その後も、困ったときにはよく相談に乗って

もらっていた。昨年10月2日に京大で開かれた「お別れの会」ではスピーチする機会を与えられ、その内容はPan African News 特別号に「追憶—東大在任中の西田さん」と題して掲載されている。

この小文では、生態人類学会の前身である生態人類学研究会の設立に、西田さんが大事な役割を果たしたことを記録しておきたい。といっても、正確なメモを残す習慣をもたないため、生態人類学会ニュースレター (NL) No. 1 (1996) に掲載された3つの記事、すなわち伊谷純一郎先生の「生態人類学会の設立に寄せて」、私の『生態人類学研究会』を回想する」、そして西田さんの「生態人類学研究会の発足の頃」を若干補足することになりそうではある。

私の理解では、生態人類学研究会の誕生までに3つのステップがあった。第1は、西田さんが東大の助手になったこと、それと連動し、東大生態人類学グループのメンバーだった原子令三さんが、1970年に京大人類進化論教室の助手になったことである。なお、私自身はこの流れとは別であったが、1970年に東大人類生態学教室の助手に採用された。これらの人の動きがばねとなり、3つの研究ユニットで始動していた生態人類学への志向を強化したのである。なかでも、京大出の西田さんが学風の違う東大で活躍したことが大きかったと思っている。

1970年ごろの各研究ユニットの状況を簡単に記すと、京大では伊谷先生のもとで掛谷誠さんらが人間を対象とする調査をはじめていた。東大人類学教室では、渡辺仁先生のもとで武田淳さんらが生態人類学を標榜し調査をはじめたところに西田さんが加わった。東大人類生態学教室では、鈴木継美先生が野外調査に強い関心を寄せ、私や院生が調査を開始していた。どの研究室でも、院生らが増えていた。

第2は、より具体的なことである。伊谷先生の発案で、文部省科学研究費で比較的大型の総合研究という枠で、「南西諸島における生態人類学研

究」と題するプロジェクトが 1971 年に実施された。私自身は 1971-72 年にパプアニューギニア調査に行ったため参加できなかったが、京大と東大の若手の交流が加速された。

第 3 はさらに具体的なことで、生態人類学を志向する面々の親交が深まり、1972 年に東大医学部で開かれた会合で、3 つの研究室のメンバーによる研究発表会の開催が決まった。1973 年 5 月 28 日に東大本郷の学士会館分館で開かれた、第 1 回生態人類学研究会である。もっとも、西田さんが NL に記しているように、この研究会の名称を議論した形跡はなく、「第 1 回生態人類学研究会」は西田さんがメモ帳に勝手に記したものであった。文字どおり、西田さんは生態人類学研究会の名付け親だったのである。

西田さんの NL の記事には、第 1 回生態人類学研究会で発表した 8 名の氏名・演題とともに、田中二郎さんと共同で復元したという、第 24 回までの生態人類学研究会の開催場所も記されている。さらに、「生態人類学研究会の『よき伝統』には、次のようなことが含まれる」として、6 つの点が強調されている。是非、ご一読いただきたい。

最後に、西田さんの著書 *Chimpanzees of the Lakeshore: Natural History and Culture at Mahare*, Cambridge University Press, Cambridge, 2012 が無事出版されたことを記録しておきたい。西田さんがマハレのチンパンジーにかけた情熱と、彼が「英語の単著を書きたい」と言っていたことを思い出している。

親友西田のこと

加納 隆至
京都大学名誉教授

(以下は、2012 年 1 月 28 日、豊中市の加納邸における加納さんと佐藤の会話の再現です。出来る限り忠実に再現したつもりですが、もし、間違っていたら、すべて佐藤の責任です。)

佐藤「今日は、西田さんの思い出についてお伺いします。加納さんと西田さんと言えば、碁ですが、いつ頃から、西田さんと碁を打ち始めたんですか。」

加納「最初のアフリカ調査の時は、西田とは将棋しかせんかった。俺は伊谷さんと碁を打ってたけど。俺の碁の最初の師匠は田中二郎やで。西田が碁を打ち出したのは、東大に行って、原子さんと打ち出してからやないかなあ。」

佐藤「大塚さんも居ったし。当時、東大の生態研究室では確かによう打っていました。そうすると、対戦開始は 1970 年代になってからですね。」

加納「琉大に就職してから東京に行くと、一杯やった後、必ず市川の西田邸に泊めてもらうてようやった。」

佐藤「西田・加納の対局と言えば、ワンバ 60 連戦を思い出します。」

加納「例の 60 連戦な。1979 年、西田がワンバに 2 回目に来た時やった。そやけど、当時のノート全部ひっくり返してみたけれど、どこにも書いてなかった。どうしたんやろな。」

佐藤「当時、私に届いた加納さんからの手紙では、これまで 60 戦以上したが、ほとんど俺が勝ってるけど、西田はいっこうに石を置こうとしない、というようなことが書かれていました。」

加納「ほとんどと言うのはなかったと思うけど、まあ、40 勝くらいはしたように思う。それも、俺が勝つときは何十目も勝つけど、西田は 1、2 目

やったな。まあ、ようやったわ。森から帰ったらすぐや。とうとう、現地人トラッカーに怒られた。夜、トラッカーがチンパンジーの報告に来て、二人とも碁に夢中で全然聞いてなかったらしいわ。」

佐藤「ずっと互先やったんですか。」

加納「ずっとや。それでもな、俺が琉大から霊研に移った頃から、五角か西田がちょっと強うなったように思う。それ以前は負ける気せんかったけど、その頃にはもう自信がなかったな。」

佐藤「他に忘れられないことは？」

加納「俺の人生の大事には西田がいつもおった。ピグミーチンパンジー研究も西田が道を開いてくれたし、琉大の就職も西田がきっかけを作ってくれた。当時、新婚で職がなかったとき、琉大の話を見つけてくれたのが西田やった。そんなこともあって、1975年にピグミーチンパンジーの餌付けが成功し、個体識別も進んできたとき、2頭のメスにハルとイクの名を付けさせてもろうた。そんな西田にもあせったときがあったな。カソグで餌付けが成功した後のことやった。1967年やったと思うが、晴子さんが結婚するかもしれん、ということで取る物も取り敢えずカボゴから日本に帰った。あせつとったな。まあ、その甲斐はあったけどな。」

佐藤「西田さんは加納さんにとってどんな人やったですか。」

加納「大げさなようやけど、生死を共にする同志やった。三年前、おれが入院していたときには見舞いに来てくれた。彼が車椅子を押してくれて、ロビーで長い間話をした。その後、退院して元気になったので2010年11月には京都へ出かけ、京大の時計台にあるレストランで夫婦4人で食事を楽しんだ。亡くなる2ヶ月くらい前、寺嶋君から報せがあって、京都の病院に見舞いに行くと、西田が涙を流して喜んでくれた。退院したら碁を打とうな、と言うて別れたけど、それがかなわず残念やった。西田と同じ時代を過ごせてほんまに楽しかった。俺にとっては西田がおらん霊長類学は

もうええという感じやな。」

佐藤「そんなことは言わんでまだまだやって下さい。」

この辺りから、佐藤のメモ取りがあやしくなり、読み返しても意味不明なので、会話録はここで終了します。加納さんは、量は少なめですが、顔色一つ変えず飲んでおられました。相変わらず勧め上手でした。

(佐藤弘明文責)

東京大学理学部人類学科生態学研究室時代

口蔵 幸雄
岐阜大学

大学へ行ったら動物の観察で飯が食えるようになったらいいなという思いを持った純朴な田舎の高校生であった私は、人類学科(名称が変わって生物学科人類学コース)に進学するようになってしまいました。入学後、動物生態学を志すようになったのですが、その時に東大理学部動物学科には生態学のコースがないことを初めて知り、困惑してしまいました。東大に行けば、何でもできると思い込んでいたのです。当時は受験情報など発達しておらず、田舎者は都会の大学の細かい実情などは何もわかりませんでした。それから、大学でのすったもんだの後、駒場で進級(?)説明会の時に、鈴木尚先生の理学部人類学科の紹介の時に、生態学をやっている教員もいると聞き、じゃあそこに行こうと決めました。ヒトも動物だからまあいいかと、かなりいい加減になっておりました。

本郷に来て、学生室の隣が、生態学の部屋でしたが、進級したての頃は、そうとは知らず、怪しげな人たちが出入りする部屋だと思っていたものです。もう記憶に濃い霞がかかっているのです

が、住人が西田さん、武田さん、大塚さんは医学部人類生態に就職した頃だったと思うのですが、入り浸っていたようです。その他、遺伝の豊増さん、葭田さん、早見さん(当時日本女子体育大学)のような方も含まれていたように思います。原子さんはもう京都へ行かれた後だと思います。西田先生と親しくさせていただくようになったのは、房総の高后山のニホンザル学生実習に行つて以来のことではないでしょうか(その前からか?)。大塚さん、武田さん、岩野(現、島さん、堀の中から出てきた後か?)さん、四元さんらも参加して、キャンプ気分でした。楽しい教室に来てよかったと思ったものです(その後がいきませんが)。それがきっかけかどうか、生態学の部屋に出入りするようになり、楽しく過ごさせていただきました。西田さんは、弁当を食べながらよく碁を打っていらっしやいました(相手はたいてい大塚さん)。西田さんは、弁当を一時に食べるのではなく、何度にも分けて食べていました。なぜだったのでしょね。変なことを思い出します。同じ市川市にアパートを借りている時代もあって、夫婦で遊びに行ったこともありまして。さて、大学院になると、煎本さん、秋道さんも入ってきて、私と佐藤弘明さんを含め渡辺仁先生の指導を受けることになり、一方では、西田さんのもとで、岩野、四元両氏がニホンザルの研究を行うという、生態学研究室の全盛時代(?)でした。

しかし、渡辺先生が考古学教室に去られてからは、東大理学部での人類の生態学研究志望の学生は、我々を最後に途絶えてしまいました。思えば花火のようなはかない命でした。それでも、しばらくは丹野さんや佐藤俊さんが赴任し、長谷川夫妻も加わり、にぎやかでした。(その後、西田さんが在籍中は、霊長類研究は続いていましたが、それも途絶えました。ここにおいて、東大人類における生態学関係は絶滅しました。)孤児になった我われ人類研究グループは西田さんによって救われました。少なくとも私が、まがりなりとも研究者生活を送れるようになったのは、ひとえに

西田さんのおかげです。感謝してもしきれません。心より哀悼の意を表します。

西田利貞さんを偲ぶ

佐藤 俊
筑波大学名誉教授

思い返せば、西田さんは、私の人生の節目に偶然に現れる不思議な人でした。

最初におめにかかったのは、西田さんが東大に就職する歓送会でした。当時、私は、学部生で、動物学教室に出入りし始めたころでした。なぜか、コンパがあるというので、友人に誘われて、赤垣屋で、伊谷、池田両先生をはじめとして人類学研究室のメンバーの方々のそばでしこたま飲んだ記憶が残っています。

私が、修士論文の課題として白山のニホンザルを調べることになって、ニホンザルの何を研究するか、悩んでいたときに、西田さんのニホンザルオスのグルーピングに関する論文をよみました。これは、オスザルが群れ間を移動することを明らかにしたもので、それまでニホンザルの群れが閉鎖系をなすと理解されていたのに対して根本的な変更をしいるものでした。これで、私は、オスザルのグルーピングをテーマにすることにしました。

このあと、西田さんとお会いすることはなかった。しかし、北ケニアの遊牧民を調査するために、ナイロビで田中二郎さんと準備をしているときに、チンパンジー調査にむかう途中の西田さんとニューアインスワース・ホテルで一緒することになりました。当時は、ナイロビの治安はよくて、毎晩のように、西田さんたちと歩いて街中に出向いて食事をしていました。そして、北ケニアへの出発をホテルで見送っていただきました。

西田さんと身近に接するようになったのは、私

が東大の助手に赴任してからです。この時期の人類学教室には、西田さんのほかに、丹野、宝来さんたちもおり、さらに、原子さんも明大にいました。我々は、週一回のわりあい研究会をもっていました。これには、保健学教室にいた大塚さんも参加することがありました。研究会のあとは、きまって本郷界隈の飲屋にしげこむことになっていました。

この頃の西田さんは、行動学にこっていたようです。酒の飲み方は、ガブのみではなく、ゆっくりとのむタイプでした。しかし、酔うと、イタズラ行動をするので一緒にいる我々にははらはらすることがよくありました。ほろ酔い気分で、通りを歩いていると、突然、悲鳴がするので、振り向くと、髪の毛に触られた女性がビクビクしてかわすところでした。この髪の毛さわりの行動は、我々の間では周知のこととなり、注意すると、西田さんは、髪触りだけでは女性は怒らないものだと確信していました。さいわいにも、この行動で問題になることはありませんでした。

やがて、私は立教大をへて筑波大に異動し、西田さんも京大に異動したので、会う機会はなくなり、年一回の生態人類学会でお目にかかるぐらいになりました。とくに、寺嶋さんと西田さんが音頭をとって、伊谷杯、原子杯という囲碁会を、京都の嵐山と名古屋でそれぞれもつようになってからは、少なくとも年二回は、これらの囲碁会でお会いすることになりました。

しかし、西田さんは囲碁が強いので、私と打ってくれることはほとんどなかったのですが、それでも、ときたま時間があくと、私に四石置かせて相手をしてくれることがありました。西田さんは、容赦なく攻めてくる碁をするので、私はついに一度も勝つことができませんでした。私には苦手の一人となっていました。それでも、一度は勝ちたいと思っていたので、その機会がなくなって残念な思いです。

思い返せば、西田さんはスマートながらもイタズラ心のある人でした。今は、西田さんのご冥福

を祈ります。

西田さんに感謝

佐藤 弘明
浜松医科大学

西田さんが亡くなられて早や8ヶ月。しかし、西田さんがこの世にいないという気がまったくしない。西田さんは、私が学部3年のとき京大から東大に来られ、その後、私が琉球大学に移るまで6年間、一緒に居させてもらった。期間は6年であったが、私の人生にとってその6年は決定的であった。

私がアフリカに行き始めてから、アフリカになぜ行くのか、とよく聞かれることがあった。自分自身でも明確なところはわからず人類発祥の地だからとか、少年の頃からあこがれの地だったからと答えることが多かった。しかし、本当のところは、西田さんに刷り込まれたのである。西田さんの隣室にいた私は、昼となく夜となく、研究室でも飲み屋でも、西田さんが歯切れの良い口調で語るアフリカの話の毎日のように耳にした。チンパンジーの詳細な行動、カソゲ基地、マハレ山塊、マハレの動植物、タンガニーカ湖、湖上の船旅、湖に舞い上がる竜巻、トラッカー、トゥング人、ムワミ、トゥング人の双子の儀礼、食事、酒。西田さんは数え切れないほどの話をしてくれた。おかげで私の頭の中にはカソゲ基地の情景がすっかりできあがってしまった。タンガニーカ湖の魚ダガーに至っては、味まで判った気になっていた。極めつけは、マライカであった。西田さんの、日頃の口調とはちがった少し控えめで音程がはずれているようなないような微妙な声のマライカの歌は哀切で絶品であった。こうして私のフィールドはアフリカ以外には考えられなくなっていた。

1976年、加納さんを隊長とするピグミーチンパンジー隊の一員として私は初めてアフリカを訪れた。私は、ピグミーチンパンジーと住民との関係、住民の森林利用というピグミーチンパンジーが分布する地域住民の調査を担当した。2回、延べ14ヶ月にわたる調査期間中、初めてのアフリカゆえのさまざまな難儀があったが、私を救ってくれたのは学部時代の高岩山でのニホンザル観察実習の経験であった。それは私にとってほとんど初めての野外生活であったが、森の路の歩き方、草木、動物、鳥、昆虫の名、猿の鳴き声の意味、猿の観察の仕方、猿の追いかけ方、キャンプ料理、まむしの調理法に至るまで西田さんの教えは的確で判りやすく、早天の慈雨のごとく私の身体と頭に吸い込まれていった。1976年以來、35年間アフリカの森の中を何とか歩き回ってこれたのは、西田さんのこのときの指導の賜であった。

このように沖縄に居ても、アフリカに居ても、私の中には西田さんが住み着いてしまっているので、西田さんが亡くなられたと聞いても、そんな気がまったくしない。今、この時点でも、“昔は、おれに4子置いとったのになあ”とぼやく西田さんが私の頭の中に居る。

原子さんが逝き、伊谷先生が逝き、そして西田さんも。きっと、碁会はもう始まっているかも知れませんが、そのうち私も行くことになるでしょうから、その折は、伊谷杯、原子杯に参加させてください。

西田さん、ありがとうございました。

華麗な碁、華麗な人生

篠原 徹

滋賀県立琵琶湖博物館

最近送られてきた西田利貞さんの『Pan Africa News』追悼号や著書・受賞歴・略歴などを記した

冊子、そしてご遺族から送られてきたケンブリッジ大学出版の最後となった著作などをみて、つくづく西田さんという研究者は華麗な研究、華麗な人生を歩んだ人だと思いました。研究や人生が華麗であったのと同様に彼が好んだ囲碁の世界でも、華麗な打ち手であったと思います。もちろん彼に4子ぐらいい打ってもらっていて、最近やっと2子で打てるようになった私ですから、とても他者の棋風や棋力を評する力などないことを承知で言うのでありますが、これも内緒にしておきたいことなのですが、生態人類学会と共に歩んできた生態人類学会囲碁大会、そしてその後独立した夏と冬の原子杯争奪囲碁大会において実は記憶に残るところでは西田さんに囲碁で勝ったことがないのです。

昨年4月14日木曜日であったと思いますが前日に電話があり、西田さんの様態が悪化しているというので掛谷誠夫妻と北大路の病院に見舞いにいきました。もともと痩身であった身体がさらに細くなっていて、あまり言葉を交わすことができませんでした。次の囲碁大会で勝ちたいのできてくださいというつもりでしたが、桜の散りかけている鴨川の土手を3人で歩きながら帰りました。

花びらの散りゆく先や宵の闇

それからしばらくして西田さんは永眠されましたが、卯の花や紫陽花の咲く6月7日のことでした。通夜の席で西田さんの友人・知人・教え子などのつらそうな焼香をみました。

紫陽花や遺影を見やる友の顔

それにしても私たちの世代では死者と生者の間隔がどんどん縮んでいき、身の傍の肅情や寂寥をいかんともしがたいという思いです。霊長類学や人類学のよき先輩であり、先導者であり、後続のもの目標でもあった西田さんに対して心より

ご冥福を祈ります。

西田さんと囲碁といえば、もはや伝説的な話となっている盟友・加納隆至さんと河を遡行する数日間100局を超える対局をしたアフリカでの話です。碁石がないので、キャッサバを切って一方を黒く塗り、一方は切っただけのキャッサバを白にみたてての勝負であったと伝説ではなっています。しかし、生態人類学会囲碁大会に登場するころはかなり有力な打ち手となっていました。おそらく生態人類学会囲碁大会またその後の原子杯争奪囲碁大会において優勝回数はもっと多かったのではないかと思います。

生態人類学会とともに歩んできた囲碁大会ですが、ここでは霊長類学も生態人類学もはたまた自然人類学も区別がありませんでした。こういうあり方は西田さんが望んだものであったと思いますし、これは実は囲碁だけの話ではないのかもしれない。華麗な囲碁の打ち手であったように、囲碁大会の中心は西田さんでした。この人に去られて困るのは、霊長類学や生態人類学だけではありません。老齢化の進む生態人類学会・附属囲碁部の面々も困るのです。蕪村に「洩たれて独碁を打つ夜寒かな」の句がありますが、こんなことにならないようにするのがせめて学問と囲碁を愛した西田さんへの供養だと思います。

西田先生の思い出

曾我 亨
弘前大学

1988年4月、私が人類進化論研究室に進学したとき、ちょうど西田先生も東大から京大に移ってこられた。だから私は西田先生の最初の学生ということになる。とはいえ、私が院試を受けたのは87年の秋であり、そのときの試験官は伊谷先生と高畑先生であったから、自分が西田先生の学生で

あるという意識は希薄であった。年に二回、事務でうけとる成績表(?)の指導教官欄に西田先生の名前が書かれているのが不思議だった。また、論文指導も、高畑先生やヒト屋の先生から受けるのがもっぱらで、西田さんに見ていただいたことは一度もない。だから私と西田さんは、同じ研究室に所属しながらも、縁遠い関係にあった。

それどころか私は、西田さんの合理的な態度に対して、やや反発を感じていたように思う。東大から移ってしばらくは、人類進化論研究室伝統の、あの長くてとらえどころのないゼミに耐えておられたようだが、やがて西田さんは、もうたまらん、という感じで「ゼミが長すぎる。1時間くらいにしよう」と言い出した。これは院生に大不評で、翌週も相変わらず3時間を超すゼミが続いたから(発表者が二人の場合は6時間以上)、西田さんはため息をつくばかりであった。

私もゼミを短くするなんてけしからん、と思っていたひとりだが、正直に言うと、統計を駆使した院生のダラダラした発表を聞くよりも、西田さんの切れ味よい発表のほうが断然面白かった。今でも思い出すのは、チンパンジーが川で毛皮を洗濯するビデオの解説だ。西田さんは「この後、毛皮を着るかと思った。着たら(衣服の起源を発見したとして)ネイチャーに投稿できたのに」と悔しがっておられた。私はネイチャー誌とはキワモノを掲載する雑誌なのだと学んだ。

新しい道具使用の話も面白かった。それはアリ釣りに使うような細い棒を、自分の鼻の穴に突っ込み、くしゃみを誘発させるという道具使用であった。西田さんはこれを、自分(主体)が自分(客体)に対して道具を使う世界初の報告だと息巻いていた。滑稽な事例だが、「再帰性」の原初的な形を示しているようで、聞いていた我々も大興奮したものである。

マハレのチンパンジーに風邪が流行ったときの話も面白かった。西田さんは、風邪を引いた個体をしらべ、誰から誰にうつったかを手がかりに個体間の関係を明らかにしようとした。もちろん

ん既に、集団の個体間関係については重厚なデータがあったのだが、観察した事実を徹底的に活用しようとする姿が印象的だった。

西田さんが研究室のメンバーに、理論的な方針を示されたことはない。とくに、ヒト屋の院生に対してはそうであった。人類進化論のゼミには、アフリカ地域研究センターのヒト屋の教官も多く参加していたから、西田さんは（自分が主宰するゼミでありながら）自分のカラーを出すのを遠慮しておられたのかもしれない。西田さんご自身は社会生物学にも深い関心を示しておられたが、それを研究室全体の研究方針とされることはなかった。だから、理論的な点で西田さんから学んだことは何もない。けれども、フィールドワーカーとして、現象の重要性をさっと見抜くセンスを大いに学ぶことができたと思う。

弘前に赴任してから、もう一つ西田さんから学んだことがある。ある日、西田さんから著作が送られてきた。読みすすめるうちに、私の論文も引用されていることに気がついた。それは、やや無理やりな引用だったが、私は西田さんの不器用な激励を感じた。同時に、指導教官が学生にしてあげられるのは、論文指導だけではないことを学んだ。

あらためて、西田さんのご冥福をお祈りします。

不肖の弟子

竹川 大介
北九州市立大学

私は不肖の弟子である。

西田さんが京大の人類進化論にやってきて最初の受験生だった私は、いきなりその院試の面接で、類人猿ではなくヒトの研究をしたいと応えた。はじめてのゼミでも、将来はアフリカではなく太平洋をフィールドに、ヒトの海への適応の研究を

したいと発表している。今思えば、長年アフリカで調査をしてきたチンパンジー研究の第一人者を前に、ずいぶん好き勝手なことをいったものだと思う。

実のところアフリカに行きたくなかったわけでも、霊長類の研究に興味がなかったわけでもない。むしろとても興味があった。今もある。ただ大学院の1年目で、まだ生態人類学の研究の蓄積をあまりよく知らないまま、なんとなく海が好きだったので、やってみたいことを述べていたに過ぎなかった。

しかし西田さんは、「たしかに生態人類学ももっとダイヴァーシティが必要だな。ヒトが海辺で進化したという学説もあることだし」とむしろ後押しした。こうして西田さんの独特な合理性とわりきりの早さをまだ十分に知らないうちに、私の運命は即決してしまった。

その結果、西田さんと同じ道を歩むことはできなかったが、のびのびと好きなことをさせてもらったという点でとても感謝している。もし西田さんの即決がなければ、今の私はいなかっただろう。

研究のみならず、囲碁でも不肖の弟子である。人類進化研究室の若手の中で囲碁に興味をもっていたのは、私くらいしかいなかった。研究の相談のために西田さんの研究室に行くことはそう多くはなかったが、囲碁ならばいつでも打ちに来ていいといわれていた。

西田さんの囲碁を理解できるほど強くはないので、実戦のスタイルではどうなのか知らないが、とても理詰めに石を並べていたように思う。私と打つときは、置き石をした上でそれでもまだずいぶん余裕があり、手の意味を途中で解説してくれることもあった。

もっぱら感覚的に打っていた私は、ときおり西田さんが「なるほどなあ」と感心し、その手がかかに理にかなっているかを説明してくれるとかえって恐縮した。むろん、そこは西田さんである、解説が出るのはおおむねすでに対策があるときだ。ほめたところで絶対に手はゆるめないで、

勝たせてもらったことはない。勝ちの喜びを知らぬまま私はいっこうに上達しなかった。

「もっとシンプルに言えないかなあ」と、西田さんはゼミでよくそんなコメントをしていた。科学とはどんなに複雑であっても事実を順を追ってたどっていけばだれにでも理解できるものだし、真理は単純であるほど美しい。ましてや、簡単に言えることをわざわざ難しく言い換える必要はない。理屈におぼれ背伸びをしがちな大学院生には、厳しい言葉だった。

このごろになって、人類学に関連するいわゆる「文系」の論文を読んでいるときなどに、この西田さんの教育をふと思い出すことがある。自分自身の論文でも時折それを感じる。複雑な説明や修辭的な言い回しの背景には、どこかごまかしがある。難解な表現になってしまうのはもともとのロジックが曖昧だからだ。たぶんどこか甘いのだ。

とはいうものの、科学の徒の中にあっても、西田さんの発想の根源にあるわりきりと合理性は、ひととき徹底していたように思う。最後に印象的なエピソードをひとつ紹介し、追悼としたい。

ゼミのあとだったかと思う。みなで鍋をつついてたときに、ぼそっと西田さんが言った。

「タラバガニは人間と共進化してないのに、なんでこんなにうまいのかな」

これは、もしや「人類の海への適応を研究テーマにしたい」と言っていた私に対する挑戦的な質問なのだろうか。まるで共進化の証拠を出せなければ、目の前にあるタラバガニがうまいはずがないと言わんばかりである。とっさのことに返事に詰まってしまった。

深海に住むタラバガニは、長いヒトの進化史の中で、ごく最近になるまで人類に食べられることなく生きてきた。人類はどうやってそんなタラバガニの絶妙なおいしさを感じる味覚を進化させたのだろうか。それが西田さんの疑問だった。果物食と肉食に関するチンパンジーの食物と味覚の共進化が西田さんのその頃のテーマだった。

西田さんの思いつきのあまりの唐突さに対し

即答できなかったことを、私は今でも悔やんでいる。ついタイミングを失ってしまったが、私は鍋の最中も、ずっとその間について考えていた。

「ヒトと共進化しなかったからこそ、食べられる危険のないタラバガニはわざわざ自分の身をまずくする必要はなかった、だからうまいんじゃないですか」。そんなふうにスマートに答えていれば西田さんはきっと「なるほどなあ。それ、いいね」とちいさく喜んで、次のカニに箸を進めただろうと思う。あるいはそれでもさらに「しかしシーラカンスは、あれはうまくないらしいな」そう返されたかもしれない。

やはり「タラバガニはうまくなかったらいい」のだろうか。不肖の弟子としては、いまだ西田さんのあの徹底的な合理性とさっぱりとしたわりきりの境地には、なかなかたどりつけない。「このカニうまいんだから、それでいいじゃないですか」なんてつい甘えたことを思ってしまう。

研究においても囲碁においても、おそらくこのあたりの詰め甘さが、不肖の不肖たるゆえんなのである。

クワヘリ、ブワナ西田さん

武田 淳

海洋民族生物学研究所

サム・ラトゥランギ大学客員教授

またまた世界の霊長類学会、そして人類学会から巨星が墜ちた。

その訃報に接した時は、あまりにも早い逝去に言葉を失った。世に数多くの偉大な業績を発表し、世界のトップ・レベルに立つ霊長類学者・西田利貞さんを失った損失は、計り知れないものがある。

ここに走馬燈のごとく駆けめぐる記憶の断片をたどりながら、短文をしたため、生前のご指導とお付き合いをいただいた長年のご縁に感謝し、

晩年の欠礼を許してもらおう。

小生がまだ東大・人類学科の院生だったころ、西田さんが京大から赴任してこられた。東大に霊長学者が育む土壌を培ってくれたことになる。千葉県の房総半島にある高岩山に生息する野生ニホンザルの野外調査に何度となく同行し、西田さんのフット・ワークの軽やかさとバイタリティーに驚愕したのを覚えている。現場ではサルたちの細かい行動の観察法などを指導、小屋に帰れば、晩に酒宴を重ね、夜遅くまで人生論などを語りあったものだ。

指を外の方にいっぱい反らせた片手を頬にあてるジェスチャーは、碁をやっているときばかりでなく、色んな場面でよく観察されたが、関節や身体能力の柔軟さが生涯のアクティブなフィールド・ワークを支え、チンパンジー研究に輝かしい金字塔を築く原動力になっていたのではないかと推測している。

熱帯の東アフリカ・タンザニアで野外調査を何十回も重ねていくうちにアメーバ赤痢に罹り、常習的な保菌者になっていたのかもしれない。それが完治していないころの尾籠な話で恐縮になるが、自宅があった市川駅から総武線に乗り込み、電車がお茶の水駅に着くやいなや、脱兎のごとく階段を駆け上り、一目散に目指した駅のトイレにぎりぎり駆け込みセーフという事態が幾度となくあったようだ。

1972年6月、伊谷純一郎先生のプロジェクトでタンザニアに出かけた小生は、1973年3月に帰国した。5月のある日、大学近くでの酒席で小生が悪寒を感じているのを、西田さんがとなり越しに目ざとく察し、「武田君、マラリアだよ」とささやかれた。翌日早速、東大医科学研究所附属病院に出かけ、マラリアの大権威・海老沢功先生が主治医として精査されたところ、即、着の身着のまま緊急入院、学用患者になってしまった。先生は、遠くアフリカの地からはるばる日本にきたまま卵形マラリアの原虫を持ってきてくれたことに感謝され、その後、症例5番目として報告され

たと聞いた。西田さんの素早い診断のおかげで、爾来40年近くマラリアが再発していない。

1977年、加納隆至さんのプロジェクトで、中央アフリカ・ザイール（現・コンゴ民主共和国）での現地調査のさい、西田さんと一緒になったことがある。12月に調査を終え、西田さんと小生は加納さんが運転する車でピグミー・チンパンジーの調査基地があるワンバから空港があるリサラ（Lisala）の町まで送ってもらった。二泊後、我々はザイール航空国内便で双発のフォッカー機に乗り込み、ちょうど右翼が見える位置に陣取った。ところが、水平飛行に移るや、プロペラーが空回りしているのに気づいた。まさに片肺飛行である。乗客の騒ぎに副操縦士がキャビンから出てきて、なんと大丈夫だからとだめてくれるではないか。最悪の場合は、ザイール河を滑走し、胴体着陸でもやる魂胆のようだ。川を間近に見下ろしながら2時間近く低空飛行を続け、首都のキンシャサ空港に無事到着し、ことなきを得た。

機内で西田さんは、脇に座る小生に遺書なるものを書いた方がいいよと勧めてくれたが、初めての経験だっただけに内心穏やかではなく、そこまでの余裕などは皆無だった。しかし、あのとき機内で西田さんが自分のフィールド・ノートにまめに書き留めていたのは、果たして遺書だったかどうかは定かでない。その後、本人にも奥さんの晴子さんにも確認していないのだから。

後日、日本で友人のDC10のパイロットに訊いたところ、ただ着陸態勢時に強風さえ吹かなければ事故は起こらないし、飛行機は本来、片肺飛行でもちゃんと飛べるようになっているものだと教えてくれた。

ライフ・ワークの仕上げと集大成の完成を待ち望んでいた多くの人々の期待を裏切り、多くの積荷を残したまま、あの世に旅立ってしまった西田さん。折も折、強靱なバック・ボーンとして生涯支え続けてくれた親愛なるご母堂がつい最近、亡くなられたことが病気を加速させてしまったのだろう。病床に伏しながら、きっと我が身をむし

ばんだ病魔に歯ざりし、いきり立っていたにちがない。西田さんの広大な視野の展開と鋭い洞察力は、この世ではもう見られなくなった。

思えば、強力な牙をむき出し、甚大な爪痕を残していった東日本大震災が起こった 2011 年は、西田さん始め、学友で形質人類学を専攻した佐熊正史君を含め、ごく親しい友人や知人たち九人も失ってしまう最悪の年でもあった。クワヘリニ、2011 年。

西田さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。アサンテ・サーナ、西田さん！！

追悼、西田利貞君

田中 二郎

京都大学名誉教授

西田君は 1941 年 2 月生まれ、1 月生まれの私とは 1 ヶ月違いの同級生だった。彼とは 1961 年 4 月に動物学教室に進学したときに初めて出会うことになった。転学部したり、転学科したりして 2 年前後道草を食ってきたサル学者たち、西邨顕達さん、加納隆至さん、伊澤紘生さんなどもこのとき進学してきて賑やかな学年であった。生態学、発生学、系統学などの講義に加えて様々な実験、実習があり、なかでも白浜での臨海実習、琵琶湖での臨湖実習は若き日の楽しい思い出であった。当時山岳部に所属していて山登りばかりしていた私は不真面目な学生の筆頭だったが、対照的に西田君はいたって真面目でコツコツと勉学にいそむ優等生だった。私がヒマラヤへ登山に出かけたりして留年し、ぐずぐずしている間に、西田君は、ニホンザルの離れオスは雄ザルが成熟するとならず通過する過程であり決してそれまで考えられていたような群れから脱落した落後者ではないとする修士論文を書き上げ、当時ゼミを主催しておられた今西錦司先生に高く評価され

たことをよく覚えている。

怠け者のわたしが結局 3 年遅れで東京大学文化人類学の大学院に入学したころには、西邨君、西田君、伊澤君、加納君はいずれもタンガニイカ湖岸のチンパンジー調査に出かけていた。西田君はカソゲ基地に陣取り、バナナやサトウキビを植え付けてニホンザルで先人が成功したのに見習って餌付けを試みた。粘り強い彼の努力が報われ餌付けが成功したというニュースは私がカラハリ砂漠へブッシュマンの調査に入って間もなくの 1966 年に伊谷純一郎先生からの手紙で知ることになった。はるか遠くから喝采を送ったものである。

正確な年月は覚えていないが、私が東大大学院にいたときに、西田君はチンパンジー研究の成果を買われて東大理学部人類学教室の助手に採用され、私たちは赤門に近い両研究室でご近所付き合いをしていた時期があった。その頃であったと思う、東大では人類学教室の渡辺仁先生、医学部保健学科の鈴木継美先生、そして京大では伊谷純一郎先生が率いるかたちでフィールドからの生のデータを持ち寄って語らいあう集まりをもった。それが生態人類学会の前身となる生態人類学研究会の出発であった。西田君も私ももちろん参加し、当時院生だった原子令三さん、大塚柳太郎さん、掛谷誠さん、市川光雄さんなどがアフリカ、ニューギニア、南西諸島などから持ち帰った生々しい観察結果を披歴し、深夜まで議論を深めあった。

2005 年に私は山岳部時代の仲間たちとケープからケニアまで自動車での縦断をおこなったが、途中タンザニアのアルーシャからタンガニイカ湖まで軽ヒコーキで往復し、チンパンジー調査基地のあるカンシアナ・キャンプを訪れた。1 時間ほど急斜面を登った樹林の中にチンパンジーを観察中の西田君がおり、私と西田君はそのとき初めてアフリカのフィールド調査地で会合したのである。あの調査を終えた後まもなく西田君は病魔に侵されたようであるが、彼は病と闘いつつも

最後までフィールドに通いつづけ、そして執筆活動に専念した。彼にはまだやり足りない思いがあったし、まだまだ書き残しておきたいことがあったと思う。いましばらくの時間がほしかったのではないか、さぞかし無念であったろう。でも若い後進たちが彼の遺志を引き継いでさらに研究を深めてくれるであろう。あとは後進たちに任せてごゆっくりお休みなさい。

西田君、ご苦労さまでした。そして 50 年におよぶ長いお付き合いありがとうございました。

西田さんへの感謝

丹野 正
弘前大学

私は西田さんの後輩で、院生の頃から何度もお会いしていたが、親しくお付き合いするようになったのは私が 1975 年に東大の人類学教室の助手になってからである。当時の西田さんは講師で、私たちのグループのトップとして面倒を見てくれた。でも、ここでは当時のことよりも、私が弘前大学に移った後のことについて、思い出というよりむしろ学恩を述べたい。

私が弘大に来た翌 1982 年に、西田さんから電話があり、当時のザイールの北西端にあたるウバンギ川東岸にもバンベンガというピグミー（アカ・ピグミー）がいるらしい、もし彼らを調査したいなら、83 年度の科研費の隊に加えるがどうする？とのことだった。まえに調査した同国東北端のムブティ・ピグミーは市川さんをはじめ何人もが継続していたので、私は西田さんのお誘いを有難くお受けした。そのとき彼は、ピグミーの調査の一方で、チンパンジーの調査が可能な地域を見つけて欲しいと言った。西田さんは自ら開拓したカソグ基地のほかに、比較可能なもう一つの調査地を望んでいたのである。そして西田さん自身が

以前に同様のことをやっていた、ピグミーチンパンジーの予備調査を行ない、それがのちの加納隊のボノボ調査に発展していったことを、私は承知していた。

私も、ウバンギ川東岸地域をかなり広範囲に予備調査したが、そこにはピグミーは少数しかおらず、焼畑農耕民の村がけっこう多くて、しかもどこで尋ねてもチンパンジーはたくさんいると言うのだが、どこでも彼らの狩猟の対象になっていた。川の西岸の情報を探ると、向こうにはアカたちがたくさんいる、チンパンジーもおまけにゴリラもたくさんいると言う。しかしウバンギ川は国境であって、向こうにはコンゴのビザと調査許可なしには渡れない。しかし、最後には西岸に渡り、その北から南へ村とピグミーのキャンプを訪ねて回った。確かにアカは多数いて、彼らの調査地には事欠かなかった。ただしどこで聞いても、チンパンジーもゴリラも生息しているのだが、ピグミーも村人もそれらを狩猟対象にしている。85 年にも東岸と、西岸の奥の方まで支流をさかのぼって調査したけれども、チンパンジー調査の「ここならば」という適地は見つからなかった。87 年もアカの調査を続けながら、黒田さんと一緒に候補地を探した。そして彼が帰った後、コンゴ北部の地図を再度見ているうちに、コンゴと中央アフリカとカメルーンの 3 国国境付近にあるボマサが目にとまった。実際に行ってみて驚いた。戸数 4・5 軒ほどのほんとは小さな村で、その奥の方には無人地帯が広がっており、チンパンジーもゴリラもたくさん生息していると言う。周囲を歩き回ってみるとチンパンジーの樹上のベッドの跡や、ゴリラの地上のベッドの跡を見つけることができた。このボマサの奥なら、西田さんの要望に応えることができる。私はこのとき本当にうれしかった。

それだけではない。西田さんは私にアカ・ピグミーを調査する機会を与えてくれた。そして、ムブティには見られなかった事柄を彼らに見ることができた。私が滞在したいいくつかのキャンプのアカたちは、物を数詞で数えないし、お金という

ものを知らず、物々交換という感覚さえももちあわせていなかった。ムブティは肉を求めてキャンプにやって来る村人との間での物々交換にすでに慣れていて、お金の使用も知っていた。この違いはどういうことなのか、その背後にはどんなことがひそんでいるのか、それを探ることがその後の私の研究を方向づけたのである。西田さん、本当にありがとうございました。

西田さんと生態人類学囲碁クラブ

寺嶋 秀明

神戸学院大学・人文学部

国際的な霊長類学者としてすばらしい業績をもった西田さんと長い間おつきあいさせていただいたのに、サルのことについてはあまり真剣に話を聞かなくなったのは、われながらもったいないことであると思う。その気になればいつでも何でも聞けるとの思いが仇になったということだろう。70歳というあまりに早い鬼籍入りに無念のほぞを噛むばかりである。しかし、である。もしもう一度西田さんに会えたとしてもやはりサルの話はそこそこになってしまうのも目に見えている。というのも、わたしにとって敬愛すべき西田さんは、霊長類学者である以前に「パチリの人」なのである。研究会や学会で会ってはパチリ、研究室を訪問してはパチリ、ご自宅に行ってもパチリ。そう、いつでもどこでもどんなときでも「パチリ(囲碁)」なのだ。とにかく時間があれば1局というのが西田さんとおつきあいだった。どんなに仕事に追われていても碁の時間をひねり出すことにやぶさかではなかった。

わたしが大学院に入った当時の自然人類学教室は、助手をしていた原子令三さんを中心に囲碁好きが集まっていて、ゼミ室は夕方から花札と囲碁の戦場となった。ただ西田さんはそのときは東

大で職に就いており、碁を打つ機会はなかった。しかしほどなく「生態人類学研究会」をとおして碁のつながりができた。今でもそうだが毎年、各地の温泉をめぐりながら研究会が開催されていた。夕食の後は大方の参加者はそのまま別室の「酒部屋」に移動し、グラスを片手に延々と深夜まで議論を続けるのであった。そのとき、食事もそこそこに「さあ行こう！」と声をかけてくるのが西田さんだった。われわれの行き先は「囲碁部屋」である。碁盤が数面用意されている。最盛時は伊谷純一郎、鈴木継美、原子令三といった巨頭たちも常連だった。十人を超える面々が黙々と、あるいはぼやき、また奇声を発しながら一心不乱に盤上の闘いに没頭する。酒など飲んでいる場合ではないのである。これが「生態人類学囲碁クラブ」である。

その後、いつの頃からか研究会の前日から囲碁クラブの面々が集まり、その日は囲碁だけに専念するようになった。さらに最近では、親元の生態人類学会からは独立し、正月には京都の嵐山、初夏には名古屋にて合宿をし、一晚囲碁三昧をしている。西田さんは一昨年(2009年)の新春囲碁大会までは皆勤賞だった。その最後の大会では見事優勝を飾ったのだった。

大会は総当たりのリーグ戦である。20名参加すると19局打たなければならない。なかなか全員とは打てないのが現状であるが、西田さんはいつもほとんど全員と対局し、対局数では一番であった(もっとも伊谷先生がいたときには、伊谷さんがダントツであった)。アルコールもそこそこにもくもくと対局される。12時を回るとさすがに頭ももうろうとし、次々と脱落して寝床に就く。しかし西田さんの真骨頂はそこからだ。4時を過ぎる頃まで石を離さない。「碁は、いくら打っても疲れな」とつねづね豪語していた。数局で疲れたと言う者には、「おまえは脳が弱い」となじるのである。

1990年代の中頃、西田さんは高坂正堯先生の後を継いで京大囲碁部の顧問に就任した。ここから

数年が西田さんの「パチリ人生」の絶頂だったはずだ。当時の京大囲碁部は強豪がそろっていて、1997 年と 1998 年には見事全日本大学囲碁選手権で優勝した。京大としては 16 年ぶりの優勝であった。年の瀬に東京でおこなわれる全国大会に応援に行くと言ふときの、ちょっと照れたような顔が思い出される。京大はその後全国 3 位、2 位、2 位と活躍した。

「碁の強い者は頭もいい」というのが持論であった。京大も囲碁だけの入試をするべきだというのである。西田さん自らが受験生と対局し、受験生が勝てば即合格である。総長になってぜひ実現してほしいアイデアだった。近年東大をはじめ大学のカリキュラムに囲碁を取り入れているところが増えてきている。碁はもちろんゲームであるが、勝ち負けだけのゲームではない。その戦略的な深みは他の追随を許さない。ようやく碁のもつ奥深さが理解されてきたということだろう。その意味では生態人類学を志す若い人は、ぜひ囲碁をはじめてほしい。囲碁と生態人類学や霊長類学にはあい通じ合うところが大きいにあるのだ。西田さんはなんと「俺に勝つ若者がいたら、教授の座を譲る！」とまで宣言していたのである。

この伝統の生態人類学囲碁クラブであるが、残念なのは若い人材がほとんどいなくなってしまったことである。今年はどうとう一人を除いて還暦通過者ばかりになってしまった。原子さん、伊谷さん、鈴木継美さん、そして西田さんと、あの世に行かれた人も増えてきている。毎年、囲碁大会で集まるたびに「最後の二人まで続けよう」とはげましあっているが、なんとも心さびしい。もっとも、あの世でも碁が打てるとしたら、別にあわてることはないか。偉大な諸先輩が碁盤を用意して待ってるはずだ。西田さんはさっそく伊谷さん相手に碁盤を囲んでいるだろう。そう考えると、あの世に行くのもあながち悪くはない。

交流 50 年

西邨 顕達
元・同志社大学教授

私が西田利貞さん（以下の文では単に西田と呼ばせてもらう）に初めて会ったのは、1961 年 4 月、京都大学・理学部・動物学教室に入ったときである。彼は 2 年間の教養課程を経てここに来たが、私はこの年の 3 月に農学部・水産学科を卒業しての編入であった。同じクラスには、私たちと同じく霊長類研究者になった加納隆至、伊沢紘生もいた。田中二郎も同級生であった。彼は後にカラハリ砂漠のブッシュマン研究で有名になったが、学部学生ときは登山に夢中になるとともにサル研究を志望していた。4 回生のときに、学生主体のヒマラヤ遠征を我が国で初めて成功させ、帰途インドで行ったニルギリラングールの調査で卒論を書いた。

西田と私は講義でしょっちゅう顔をあわせていたが、話をした記憶はあまりない。彼も私も後年はそうとうお喋りであったが、そのころはすごく無口であった。そして彼は、ひまさえあれば本ばかり読んでいた。それにもかかわらず、彼と交わした短い会話が鮮明に思い出される。その年の秋、翌年春から始める卒論研究で何をするつもりかと彼に聞いたところ、「サルや」という一言が返ってきた。「なんで」と聞くと、「今西さんの『ゴリラ（1960、文芸春秋新社）』を読んでサルの生態を研究していたらアフリカに行けると思ったからや」とのこと。このときの彼の短い答えは興味深い。というのは彼のその後 50 年の人生はこの時に言ったことの実現に他ならないからである。

翌 1962 年 4 月動物学教室に自然人類学講座が新設された。教授は今西錦司、助教授は伊谷純一郎で、お二人はその前年にスタートした京都大学アフリカ類人猿調査プロジェクトを推進してい

た。西田の語った夢を実現させる状況が思いのほか早く到来したのである。しかし最初にアフリカに行ったのは彼ではなく私であった。詳しい事情は省くが、私が登山を通じて高校時代から知っていた今西さんに頼みこんで実現した。私は農学部卒業の資格で、この新設講座の大学院の入試を受け、合格した。そして大学院に入ってすぐの5月にはアフリカに行き、タンガニーカ湖畔のカボゴ基地で15月間、東滋さんとともにチンパンジーの調査をやった。それまで私は魚に関してはある程度知識はあったが、サルに関してはまったくの素人だった。調査ではそう悪くないデータが得られたが、修士論文にはならなかった。

西田は伊沢、加納とともに、伊谷さんから卒論、修論の研究指導を受け、博士課程に進んだ1965年、念願のアフリカに渡った。彼ら3人はここでも伊谷さんの指導を受け、博士論文の研究をそれぞれ行った。西田はカソゲでチンパンジーの餌づけに成功し、チンパンジーの社会を一挙に明らかにした。その後も彼はここで調査を続け、発見した数々の成果はあまりに有名である。私の研究対象はその後ニホンザルと新世界ザルに変ったが、彼の仕事には常に注目してきた。これは単にノスタルジーによるものではなく、新世界ザルの中で、私が研究してきたウーリーモンキー、クモザル、ムリキのいずれもが、チンパンジーと同じく父系の社会で暮らすことがわかってきて、相互の比較が興味深かったからである。

彼が1988年に京大教授になり、京都に住むようになって以後、とくに定年退官後よく話すようになった。私が参加した初期のアフリカ類人猿調査隊に関してしばしば聞かれた。カボゴ基地のごく細かいことに関して、突然電話でせっかちに聞いてくる、ということもあった。後になって、それは彼の遺著となった“Chimpanzees of the Lakeshore”の執筆のためであったと知った。奥さんによれば、彼はこの本の完成のために最後の、渾身の力をそそいだとのことである。

彼の亡くなる直前に何回か会えたのは幸いで

あった。痛みがひどくて短期間入院していたこともあったが、ずっと自宅で過ごし、奥さんと息子さんに看取られて亡くなった。幸せな最後だったと思う。

食べる人類学者だった西田さん

山極 寿一

京都大学大学院理学研究科

幸運なことに、私は2度アフリカで西田さんとフィールドをともにさせていただいたことがある。一度目は私がゴリラとチンパンジーの調査をしていたガボンのプチ・ロアンゴ保護区、次は西田さんの長年のチンパンジー調査地タンザニアのマハレ国立公園である。どちらの地域でもなるべく西田さんといっしょに歩いたのだが、とにかく西田さんは歩くのが早い。しかも、地面に落ちているフルーツ、手に届くところにある実や葉をいちいち手にとっては口に入れる。まるで森の正体を口で味わって確かめようとしているかのようだった。チンパンジーの速度で歩いているのだな、と私は思った。かく言う私も長年の調査で、ゴリラの速度で歩く習慣を身につけてしまっている。ゴリラよりチンパンジーの方が速く歩くので、ゴリラに慣れた私には西田さんのペースが速すぎるように感じられたのだろう。

そんな西田さんを見て、ガボンの調査助手チャーチョがカニを大量に取ってきてくれた。このカニは砂浜に穴を掘って隠れていて、引きずり出すときに大きなハサミで抵抗する。チャーチョはそれをうまいことかわしてわしづかみにする。満面の笑みを浮かべた西田さんはこのカニの身を使って、スパゲッティ・ボンゴレを作ってくれた。いっしょにいた竹ノ下祐二君といっしょに食べたが、あの味は忘れられない。マハレでも西田さんの手料理でミケケというタンガニーカ湖の魚

を刺身で食べた。極めて美味であったが、土地の人は決して魚を生で食べない。西田さんが始めた食習慣であるということだった。

西田さんは現地の食材を使って、さまざまな料理を試みた。それを西田さんは 1978 年に蟻塔という雑誌の 2 号にわたって「ザイル悪食考」と題して記している。当時、タンザニアのチンパンジー調査に一区切りをつけて、西田さんは加納隆至さんとボノボの調査を実施した。そのとき、コンゴ盆地の奥深く、ガンドゥの村に住みこんで味わった多様な動物食の感想である。西田さんによれば悪食とは、「ある時代のある一つの文化と、それより‘高級’と見なされている他の文化が、宗教のタブーとしてではなく、食物と認めていない物質を、薬とか儀礼上の目的でなしに、栄養上、あるいは嗜好上の理由によって、その文化圏内で食べること」と人類学的に定義できるそうだ。それゆえ自分は悪食をしたのではないと断ってから、実際に食べた 15 種の哺乳類、6 種の鳥類、爬虫類や昆虫たちの味を語っている。最も美味だったのはダイアナ・モンキー、続いてゾウ、ブラック・フロンティッド・ダイカー、ホロホロチョウ、ワニ。6 種のサルのうち、葉食性のコロブスはまじりかただと記している。絶品はダイカーやサルの脳で、クズウコンの葉にくるんで蒸し焼きにするのが最高だという。たった一度だけ悪食をしたのは、アフリカで誰も食べない体長 4cm もあるエンマコオロギで、あまり美味ではなかったようだ。

実はこれを私はカメルーンで食べ、意外に美味だった記憶がある。

西田さんはチンパンジーの食べる植物も 52 品目味わっており、自分の好みに従って 1~5 点で採点して平均 3.5 点を付けた。チンパンジーの食物はだいたい自分の口に合うという。西田さんの鋭い観察眼は、赤ん坊の死体を抱えていたチンパンジーの母親に毛づくろいをしたオスに向けられた。このオスは死体を持ち去ったのだが、不審に思った西田さんはその糞を調べ、オスがこの赤ん坊を食べたことを確かめる。オスは母親をいたわったのではなく、赤ん坊を食べたかったのだ、と西田さんは結論付けた。食を通じてチンパンジーの世界を見とおそうとした西田さんの真骨頂だと思う。

生態人類学会ニュースレター No.17 [別冊]

西田利貞氏 追悼号

2012 年 3 月 12 日発行

学会ホームページ URL

<http://ecoanth.main.jp/>